

# 友人同士の日常会話における助言

## －会話分析の視点から－

初田 絢奈 (アリゾナ大学大学院生)

### 1. はじめに

助言は、受け手がより良い生活をするための行為を伝える大切なコミュニケーションの手段である。従って、医療相談やカウンセリングなどの制度的場面で助言がどのように行われるかは広く研究されている。助言は日常のやりとりにおいても、また求められていなくても起こり得るが、日常会話に焦点を当てた研究は多くない。しかし、Heritage(1984)が述べたように、制度的場面でのやりとりが日常会話をもとに成り立っているならば、日常会話の分析が持つ意義は大きい。本研究は、友人同士の会話をデータに、助言がどのような連鎖環境で行われるのかを検討する。また、助言と行為の非優先性との関係について考察する。

### 2. 先行研究

Searle (1969)の言語行為やBrown & Levinson (1987)のポライトネスの観点からも研究されている助言だが、Heritage & Sefi (1992)を先駆けとする会話分析的な研究は、助言の持つ二つの側面、すなわち規範性と知識の非対称性に着目し、助言がどのように行われるかは、参与者の社会的地位などにより固定されたものではなく、相互行為の中で評価される知識の程度に応じて流動することを明らかにしている。助言をするということは、受け手の規範的といえる行為からの逸脱を示唆することでもあり、それを伝えることは為手と受け手の知識の差を露呈することでもある。ゆえに、一見知識の差が明確な専門家と一般人の間でも配慮が必要となる。例えば、家庭訪問看護師と初めて出産したばかりの母親とのやりとりを分析したHeritage & Sefi (1992)では、自分の子どもに関する知識のなさへの抵抗から、母親が助言を求めることは稀だった。看護師も、知識の非対称性を最小限にとどめるため、一般論を話すなど様々な工夫をしていた。母親と娘の電話会話を分析したShaw (2013)は、命令形など強いフォームを使って助言をする資格は、「母親」「娘」というカテゴリーによってではなく、連鎖のコンテキストにより生じると論じ、このことから助言が非優先的な第1部分であることを示唆した。

日本語の助言の会話分析的な研究には、電話・ラジオ・テレビ相談を検討したものが多い(西阪, 2005; 戸江, 2007 など)。こうした場面では、何らかの問題を抱えた相談者が電話をかけたりして助言を求め、回答者が助言をするという構造がある。本研究では、特に決まった構造のない友人同士のやりとりの中で助言がどのように行われるのかを検討する。

### 3. データ・分析方法

本研究には、BTSJ 日本語自然会話コーパス(宇佐美, 2021)、国立国語研究所『日本語日常会話コーパス』モニター公開版(小磯ら, 2019)、TalkBank CallFriend (MacWhinney, 2007)の中から、友人同士二人間の会話をを用いた。Heritage & Sefi (1992)とThompson & Couper-Kuhlen (2020)の助言の定義をもとに、悩みもしくはターゲットとなる事柄が導入されることから助言に対する応答までをひとつの連鎖のまとまりとし、取り出したデータを会話分析の方法を用いて分析した。データの書き起こしにはジェファーソンシステム(Jefferson, 2004)を利用した。

### 4. 分析

まず、悩みや問題の存在が明らかになることが助言の起こり得る(起こるとは限らない)環境を生み出し、助言の為手も受け手もそれに指向していることを例示したい。これは、トラブルの語り手はあくまでトラブルの語り手でありたいのであって、助言の受け手になりたいのではないと論じたJefferson & Lee (1981)と対照的である。

断片(1)からはFの悩みを聞いたMが助言をするのが適切だと理解していることがわかる。Fは1行目で「ちょっと大変なことがあって」とバイト先での悩みを話し始め、31行目でその「最近の悩み」についての話が完結したことを示す。これを聞いたMは、沈黙の後、35行目で「解決法知ら」ないと述べる。ここでMはFの悩みを聞いた後、解決法を提示し助言する

のが適切だと理解していることを示している。

断片(1) [BTSJ410]

01F いまでもー、ちょっと大変なことがあってー、  
02 (.)  
03F うちのバイト先にー、(1.0)なんてゆうこれ。聴覚だ、[聴覚 -  
( (24 行省略：F が悩みの詳細を話している) )  
28F =そう。( >だから<) 業務しながらもかつー、コミュニケーションも  
29F とりながらかつー、.h (0.5) うまくやんなきゃだめじゃん？  
30M うん。  
31F それがなかなかうまくいかない>って最近の悩み。 <  
32 (1.0)  
33F hh [hhhhhh  
34M [かい - .hh  
35M→ @解決法しら [ねー。 @  
36F [hhhhhhhh

ではFはどうだろうか。断片(1)の続きからは、Fも悩みについて語るにより助言を期待していることがわかる。断片(1)の後、Fは好きな男性に既読無視されている、という別の「最近の悩み」について話し始める(37行目)。だが、悩みを話し終えたところでMから反応が示されず、65行目でFは「え、どうすればいい」と助言を求める。

断片(1) ((続き))

37F .hhh あとねー、最近の悩み聞いてほしい、今すっごいh [hhh  
( (12 行省略：F が好きな男性について説明している) )  
50F そう、で二ヶ月もずっと連絡しあってたんだけど、  
51M うん。 =  
52F =昨日から急に既読無視が始まったのね？  
( (7 行省略：F が今までこんなことはなかったと言っている) )  
60F 急に昨日既読無視が始まってー、  
61F .hh でまあ仕事が忙しいのかなと思ってんだけどー、  
62F 人生ー、じゃないや、その人とー、(.) 仲良くなってから  
63F 初めての経験なわけ。既読無視ってゆうのが、  
64 → (1.5)  
65F→ え、どうすればいい。  
66 (1.0)  
67F 私 [最初 -  
68M [@いや、待て [よ。 @  
69F [hhhh

Fは63行目で「既読無視」というキーワードを繰り返し、話がこれ以上進展しないことを示している。しかし、Mはこの悩みを聞いたという反応を示さず、代わりに沈黙が流れる(64行目)。これを受けてFは65行目で発話順番冒頭に「え」と配置し、「どうすればいい」と明示的に助言を求めており、助言が産出されなかったことが想定外だったというスタンスを示している(Hayashi, 2009)。このことから、悩みについて話し終えたところでFも助言を期待していたことがわかる。

また、断片(1)では、想定されたところで助言が産出されなかったことから助言求めが行われているが、このケースを除いて明示的に助言求めがなされたケースはわずかだった。多くの場合、受け手はトラブルについて話すことにより、非明示的に助言を引き出していることになる。

断片(1)は助言の受け手となる者がターゲットとなる事項を相互行為の空間に持ち込むケースだったが、その逆の場合はどうだろうか。次に為手が助言のターゲットとなる事柄を持ち出すケースをみてみたい。この場合に共通して言えることは、助言が産出されるには、為手によるターゲットの導入の後、受け手がそれを問題として認識していることが示されなければならないということである。

断片(2)は大学生のエリとアヤの会話である。この断片の前に二人は日本を一人で旅行して回った友達について話しており、断片はエリがアヤの服の毛玉に言及するところから始まる。アヤも毛玉を問題として認識していることがわかり、エリは6行目と17行目で助言している。

#### 断片(2) [BTSJ222]

01 Eri 毛玉おっきくなったね。 [hh hh hh .hh  
02 Aya [hh hh hh hh .hh  
03 Aya でもこれさー、切らないとさ、どんどん伸びていっ [てさー、  
04 Eri [そうだよねー。  
05 Aya 結局また毛玉になっちゃうんだ [よねー。  
06 Eri [毛玉取り機買えばいいじゃん。  
07 Aya なんかえりちゃんが(.)百均で買った [ (や) つだよね？  
08 Eri [ @そう、全然だめだっ [たよ。 @  
09 Aya [ あっだめ？  
10 Aya .hhh やっぱ百円ー (.)  
11 Eri 全然だ [めだった。  
12 Aya [じゃだめなん [だー。  
13 Eri [ほんとにだめだった。  
14 (0.7)  
15 Aya ジャパンデンキとか行かないと [だめかなー。  
16 Eri [うん。  
17 Eri 高性能の買った方がいいよ。  
18 (0.7)  
19 Aya でもそんな取らないよねー？  
20 (0.5)  
21 Eri え、でも [気にならない？  
22 Aya [取る？  
23 (0.5)  
24 Aya あー。なんかそっか気にしないだけかー。  
25 Eri @いやい [やいやいや。 @

1行目でエリは「毛玉大きくなったね」と笑いを伴いつつもターゲットとなり得る問題を提示する。アヤは3行目で「でも」とトピックが変わることを示し、「切らないと」伸びていく、と毛玉は切るべきものだという理解を示している。エリは同意し(4行目)、5行目でアヤが「結局また毛玉になっちゃう」と、毛玉が理想的なものではないという理解を示したところで、アヤの発話の終わり「よね」にオーバーラップする形で「毛玉取り機買えばいいじゃん」と助言を産出する。アヤは受け入れも拒絶もせず、エリが以前百均で毛玉取り機を買ったことにふれ、エリを何らかの経験がある者としてみている。そして、エリの買ったものは「全然だめだった」と聞いて、15行目でエリに家電量販店に行かないとだめかと尋ねる。エリはこれを受けて17行目で「高性能の買った方がいいよ」と再び助言している。結局助言は受け入れられることなくこの会話は終わるが、ここで注目すべきは、エリが毛玉について取り上げた後、アヤもその毛玉を問題として認識していることがわかってから助言を産出していることである。

## 5. おわりに

本稿では、データの概観から、まず、悩みや問題の存在が明らかになることが、助言が生じ得る適切な環境を生み出すと参加者が理解していることを示した。実際、助言の受け手は、多くの場合、悩みや問題について話すことで助言を引き出している。また、助言の為手が連鎖を開始する場合には、受け手が問題を打ち明ける場合と異なり、助言のターゲットとなり得る事柄を受け手が問題として認識していることがわかって初めて助言が産出されることを示した。

受け手が問題について話すことで助言が引き出されることは可能だが、この場合助言が産出されるか否かは相手次第であり、明示的に助言が求められていない以上、別の行為が産出される可能性もある。また、為手が受け手の問題認識を確認してから助言を産出するという事は、その問題認識が確認されなければ助言は産出されないということにもなる。ではなぜ参加者は明示的に助言を求めたり、いきなり助言を産出したりすることを避けるのだろうか。これには、助言の特質である規範性と知識の非対称性が関係しているだろう。つまり、助言の行為としての非優先性が議論される背景には、参加者が規範的な行為をしていないと示すことと知識の差を示すこと両方に抵抗を感じているということがあり、今回、友達同士の日本語の会話データでもそのことを示すことができるとわかった。今後、制度的場面のデータとの比較を通してさらに理解を深めたい。

### 参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayashi, M. (2009). Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 41, 2100-2129.
- Heritage, J. (1984). *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Heritage, J., & Sefi, S. (1992). Dilemmas of advice: Aspects of the delivery and reception of advice in interactions between health visitors and first-time mothers. In P. Drew and J. Heritage (Eds.), *Talk at work: Interaction in institutional settings* (pp. 359-419). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In G. H. Lerner (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation* (pp. 13-23). Amsterdam: John Benjamins.
- Jefferson, G., & Lee, J. R. (1981). The rejection of advice: Managing the problematic convergence of a 'troubles-telling' and a 'service encounter'. *Journal of Pragmatics*, 5, 399-422.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉(2019). 「日本語日常会話コーパス」モニター公開版 コーパスの設計と特徴 国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書, 3.
- MacWinney, B. (2007). The talkbank project. In *Creating and digitizing language corpora* (pp. 163-180). Palgrave Macmillan UK.
- 西阪仰(2005). 「語句の配置と行為の連鎖：プラクティスとしての文法」 片桐恭弘・片岡邦好(編) 『講座社会言語科学5 社会・行動システム』ひつじ書房pp. 176-201.
- Searle, J. (1969). *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shaw, C. (2013). *Advice giving in telephone interactions between mothers and their young adult daughters* (Unpublished doctoral thesis). Loughborough University, Loughborough, England.
- Thompson, S. A., & Couper-Kuhlen, E. (2020). English why don't you X as a formulaic expression. In Laury, R., & Ono, T. (Eds.), *Fixed Expressions: Building language structure and social action* (pp. 99-132). John Benjamins: Amsterdam.
- 戸江哲理(2007). 「テレビ人生相談における相談—助言の相互行為的達成—成員カテゴリー化分析を中心に」『マス・コミュニケーション研究』, 70, 139-156. 日本マス・コミュニケーション学会.
- 宇佐美まゆみ監修 (2021). 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2021年3月版』, 国立国語研究所, 機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」